MfG_J_comparison_Matsuzaki_Settaya_Nagaoka　　2020 Nov

西伊豆・松崎と、長岡・摂田屋の比較

1. 海鼠壁土蔵の町、松崎と、長岡・摂田屋の比較

2. 若き依田佐二平と吉澤仁太郎の類似点

　　官営富岡製糸場に関連する話題

3. 伊豆・松崎町の鏝絵で思ったこと

補足　浄土真宗本願寺派　華水山　浄感寺

補足　海鼠壁

西伊豆・松崎と、長岡・摂田屋の鏝絵は、
比較するものではありません。

西伊豆・松崎と、長岡・摂田屋の起業の背景は、
歴史、業種、規模、いろいろ差異はあるが、
共通した起業家精神があるように感じます。

1. 海鼠壁土蔵の町、松崎と、長岡・摂田屋の比較　　(C) 春日

長八美術館のあります伊豆の松崎町は、海鼠壁土蔵の町として知られており、今も190戸余りの海鼠壁土蔵の建物が残っていると言われています。

松崎は古くから早場繭の産地として知られ、養蚕の起源は少なくとも200年以上前から行われていました。そのため豊かな農家が多く、農産物や家具の収納のため海鼠壁土蔵か建設され、まゆの製糸の工場も海鼠壁土蔵で作られました。松崎の隆盛は、松崎の若干26歳の名主、依田佐二平の「決断」が、全ての始まりといえます。 明治5年(1872)、群馬富岡の官営富岡製糸場の操業開始後、直ちに一族の子女6名を富岡製糸場に送り込み、その3年後、技術習得を終えた彼女らを帰郷させ、自分の工場を機械化して試作し、さらに翌年の大量生産・品質安定工場の経営に結びつけたのです。

幕末から明治の始めにかけ、横浜の生糸商人が大量買い付けに訪れ、その初繭取引で決められる“伊豆松崎相場”は、欧米にまで知られたそうです。
ところが、渋沢栄一も設立に関わった官営富岡製糸場は、当初女工のなり手がなく、工場建設も担当しました尾高淳忠初代所長は、まず自分の娘を女工にしてから、全国各地の士族の娘を募集するような状態でした。
前述の依田佐二平の女子派遣が、当時、如何に思い切った行動であり、また時代を先取りした、先見性に富んだものであったかがわかります。

2. 若き依田佐二平と吉澤仁太郎の類似点

この依田佐二平の若い時の様子は、若き日の吉澤仁太郎に似ています。
明治17(1884)　21才　サフラン製造開始
明治27(1894)　31才 定明から摂田屋に移転
山田又七が明治23年石油業進出、29年比礼から長岡まで鉄管パイプライン敷設、オイルシティに邁進する時期と軌を一にしています。そのような活気にあふれる街を眺めつつ、吉澤仁太郎も創業に賭けたのではと思えるのです。
明治維新後、海外から薬用酒が多く輸入されるようになり、全国の多くの酒造り業が、それに対抗ようとした、時代の空気も、養蚕に類似しています。
さらに後のサントリー、鳥居商店も、薬用酒の添加材料にした機那ですが、満二十歳の烏井信治郎が、大阪の、砂糖や、苦味を出すキニーネもすぐ手に入る場所に烏井商店を開業したのが、明治三十二年(1899)と言われています。 吉澤仁太郎に遅れること、十五年でした。

地域	伊豆・松崎町	長岡・摂田屋
地域繁栄勃興のベース	養蚕製糸業	石油採掘、摂田屋の醸造
青雲の若者	依田佐二平	吉澤仁太郎
彼の新しい工夫	機械化	機那入り薬用酒
事業の拡大	伊豆松崎相場でリード	全国展開、ハワイ輸出
塗額、鏝絵の創造	入江長八	河上伊吉
特徴（個人的感想です）	絵画・装飾、絵師の技術	祈り・装飾、左官の技術

官営富岡製糸場に関連する話題

ちなみに、渋沢栄一も設立に関わった、この官営富岡製糸場は、明治24年(1891)の払い下げ入札で、片倉組に渡り、後に三井家にいき、さらに明治35年(1902)、横浜の豪商、原富太郎(原三渓)が引き継ぐことになりました。

官営富岡製糸場
横浜の豪商、原富太郎(原三渓)
日本画家の支援

三渓園保勝会により保存され、一般公開

原富太郎旧蔵の国宝の孔雀明王像（東京国立博物館）ほか
多くの美術品収集

同時代の画家（小林古径、前田青邨、横山大観、下村観山、今村紫紅、速水御舟、安田靫彦ら）の作品を購入したり、生活費を支給したりして援助したパトロンでもあった。

3. 伊豆・松崎町の鏝絵で思ったこと

(1) 松崎町

伊豆の長八美術館、そして極く近くの浄感寺・長八記念館の二枚看板の施設、それらの周りのなまこ壁の通り、という地区全体（おそらく摂田屋をズイドでご案内するエリアと同じくらいの面積）で統一した「漆喰わざ」のテーマを見せるもので、なかなかのものでした。
全国鏝絵漆喰コンクールの優秀作品の展示会も開催されており、盛んな技術保存普及の活動にも驚きました。

(2) 摂田屋の鏝絵、松崎町の鏝絵の違い

摂田屋の伊吉さんの「色漆喰」に対して、松崎の長八さんの「塗額(ぬりがく)」や「建築装飾」の漆喰彩色は、それとは全く異質の別のものでした。「塗額(ぬりがく)」という分類の製作法は板に漆喰塗りで下地を作ったところに絵を着色で描くというもので、板に下地用絵具を塗って油絵を描くのと同じ要領です。 室内の壁の装飾を目的とする「建築装飾」とともに、板絵のような装飾画を目指したもののようで、サフラン酒の鏝絵とは印象も全く異なるものでした。

これらの漆喰彩色は、技術的にはフレスコ画に近いはずですが、松崎の漆喰彩色は、毛筆の筆よりも細い、日本画や仏画で細線を描く時に使うような細い筆により彩色するもので、第一印象は、むしろテンペラ画、油彩画に近い感じでした。
絵漆喰コンクールの優秀作品のなかには、中世宗教書写本の細密画を思わせるもの、ミニ塑像の集合のような作品もあり、面白い進化でした。

(3) 個人的な感想

技法で比べると、鏝で塗り込む技の冴えという点では、伊吉さんの「色漆喰」に軍配をあげたいと思いますが、浄感寺・長八記念館の絹本着色の絵を見ると、長八さんの絵師としての技量も、相当のものと分かります。 私は個人的意見として、鏝絵とは、終始、鏝のみで造形し、できれば色も、元々着色された漆喰であるべきと思います。しかし、世の「鏝絵」と称されるものは、そうではないのが大半らしく、大胆にすると、四つほどに分類できるのではないかと思っています。

A　色漆喰を鏝で浮彫風に造形する。 筆による彩色なし。（造形による芸術）
B　白漆喰を鏝で浮彫風に造形する。 そこに筆で着色、描画。（絵画による芸術）
C　基材部のみ白漆喰で多少の凹凸をつけて作成し、上に筆で着色、描画。
D　基材部のみ平面的に白漆喰で鏝で作成し、上に筆で着色、描画。

Aの手法を採用しているのがサフラン酒の鏝絵、そしてBの手法が伊豆松崎の塗額で、狩野派の修行を積んだ長八の面目躍如です。尚、長八さんは、C,Dの領域も、製作していたようです。
Aのサフラン酒の鏝絵では、大黒様の大判金貨のみが、筆による彩色とされています。
Bの手法は、フレスコ画に似ていますが、Bでは、乾燥した漆喰面に描画し、美しい日本画的混色を実現しています。 江戸狩野の修行を積んだ長八には、この乾燥した漆喰面が必須だったのではないかと、思っています。従来の鏝絵に関する資料では、これらを明確に区別せずに、自らを「鏝絵」と記述しているものが多く、これらが、漆喰をもとにした芸術の正当な評価を妨げているように思います。 この四つの芸術は、一緒に論ずるべきものではなく、それぞれが技術

的、芸術的に別物であり、優劣を比べるものではないと考えます。
むしろ、どういう点でユニークか、を語っていきたいと思っています。

鏝絵には、いろいろな見方があります。 一方、フレスコ画については、膨大な研究の歴史があり、専門家でない私が「どうこう」というのは、僭越の極みです。
ただ、大胆にいわせてもらうと、フレスコ画も、その描かれた時代、地域によって、さらに製作者や製作グループにより、本当に様々な手法に分かれるということは間違いなく、世界のあちこちに変種が見られるように、簡単に定義できるようなものではないことも、事実だと思います。
たまたま私は五十年ほど前から、シルクロード壁画に関心を持ち、塑像や絵画の視点とともに、地域的特性による博物史な観点からも、いろいろ本を読み、関心を持ち続けてきました。
このサフラン酒のウェブページのなかでも、「こんなガイドができるのではないか」と、いろいろと文章を投稿してきましたが、なかなか、ひとつの説明に至っていません。
ただ、鏝絵、特にサフラン酒の鏝絵と、ほかのフレスコ画とは別物のようです。
それぞれ、それらの製作背景、製作の意図を含めて楽しんでいただけたら、それで十分と思っています。

鏝絵とフレスコ画については、いろいろな学説があり、断言は難しいですが、以下に、現時点での、私なりの、鏝絵とフレスコ画との違いと再定義を、表にしてみました。

A	色漆喰を鏝で浮彫風に造形。 筆による彩色なし。	造形による芸術	鏝絵 特に、サフラン酒の鏝絵
B	白漆喰を鏝で浮彫風に造形し 乾燥前に、筆で着色、描画。 （造形後の6時間後が適時）	絵画による芸術 (絵画と二次元造形)	ブォン・フレスコ 鏝絵 特に伊豆・松崎の鏝絵
B’	白漆喰を鏝で浮彫風に造形し 乾燥後に、筆で着色、描画。	絵画による芸術	フレスコ・セッコ
C	基材部のみ白漆喰で多少の 凹凸をつけて作成し、 上に筆で着色、描画。	絵画による芸術	フレスコ・セッコ
D	基材部のみ平面的に 白漆喰で鏝で作成し、 上に筆で着色、描画。	絵画による芸術	フレスコ・セッコ

補足　浄土真宗本願寺派　華水山　浄感寺
浄感寺・長八記念館
宗祖　　親鸞聖人　承安3年1173()～弘長3年(1263)
開基　　浄信上人　約700年前(永仁年間　鎌倉時代)
中興　　正観上人13代　安永10年(1781)～弘化2年(1845)
この寺は永仁年間の創立ですが、元禄時代(約300年前)の松崎村大火により
御本尊のみお助けし、伽藍などは全焼しました。以来仮本堂でしたが弘化2年
(1845)12月15日立柱し弘化4年(1847)3月中旬落成され現在に至っています。
棟梁　　森富蔵
彩色　　入江長八
彫刻師　　石田半兵衛邦秀

◎本堂は紫簾殿風造りで耐風耐震建築です。御拝柱、染または海老虹梁には
江戸時代の名人彫刻師石田半兵　衛邦秀の透かし彫等が施されている。
　これらの彫刻と像、獅子頭などを含めた彫刻は平成6年12月16日松崎町文化財に指定。
1代目　石田半兵衛(宮大工)・2代目　石田半兵衛邦秀(彫刻師)・1代目の孫　小沢一仙
斎信秀(彫刻師)
◎本堂内には、江戸末期から明治初年代に活躍した入江長八「文化12年(1815)8月5日～
明治22年(1889)10　月8日享年75歳」が学び育てられた恩返しの力作八方睨みの龍・
飛天の像や松鶴・正観上人のお姿の掛軸などがある。
　これらの作品は、昭和48年(1973)6月22日松崎町文化財に指定され、平成23年
(2011)3月18日八方呪　みの龍と飛天の像一対が静岡県有形文化財に指定されました。
　長八の作品は独特の芸術で漆喰を塗り重ね(彫塑)彩色したものです。
◎当山中興正観上人は、寛政(1789～1799)末期頃より塾(華水塾又は浄感寺塾)
を開き、その子弟530有余人　を輩出しています。その中には土屋三餞(三徐塾)、
下田に塾を拓いた漢学者高柳天城、彫刻師石田半兵衛邦秀、　漆喰芸術を
完成した入江長八がいます。　当山は松崎町の学文発祥の地と言われています。
◎正観上人は本願寺使僧として西国に赴いた際、備後の国(広島県東部)より備後表の苗と
琉球表の苗を持ち帰り試作したところ琉球蘭草(ランソウ、ふじばかま)が見事に成功したので
農家に分け与え栽培をさせました。南国の強い太陽の光と海風により乾燥させた蘭草は、耐
久性や艶もよく、その蘭草で織った畳表は一躍有名になり浄感寺表、後に松崎表、桜田表と
言われ松崎特産として売り出され農家を潤したのですが、第2次世界大戦により食糧不足と
なり琉球田はみな穀物を作るようになった。現在琉球田は見られません。
◎現在の本堂の屋根は強風が吹くため、1丈2尺(約4m)切り詰めてありますが、当時は今より
高かったので清水や沼津方面から松崎港へ来る船は、伊那下神社の大銀杏と浄感寺の
屋根を目当てに入港したと言われています。

浄感寺18代　本多正弘

補足　海鼠壁

土蔵などに用いられる、日本伝統の壁塗りの様式の一つ。
壁面に平瓦を並べて貼り、瓦の目地に漆喰を蒲鉾形に盛り付けて塗る工法によるもので、目地の盛り上がった形がナマコ（海鼠）に似ていることからその名がある。
この目地部分を漆喰で盛り上げるのは、目地部分から水が浸透して瓦の裏に水が回って、剥離を早めるのを防ぐためである。
松崎の冬の西風は猛烈で、吹き始めると3日は止まないと云われ、より堅牢で、火事にも強い建物が求めらた。
海鼠壁は、風雨が吹き付ける部分に、瓦を壁に張り巡らして補強するものである。　防火、防湿、保温に優れる建造方式である。
林業や漁業の発達もあり、豊かになった人たちが競うようになまこ壁造りの家を建てた。「なまこ壁」は職人と風土、産業が活発化した時代の産物だったとも考えられる。

目地が斜め格子状になっているものを四半張り、縦横に通っているものを馬張りと呼ぶこともある。

四半張り　　馬張り

Namako-kabe wall is one of the traditional Japanese wall-painting styles used for buildings. In Japan today, it can be found on the walls of old storehouses and castles.
Flat roof tiles are installed side by side on the wall and these tiles are fixed with plaster in semi-cylindrical shape.
Namako, Japanese, means sea cucumber.
The name comes from the raised shape of the joints , which resembles sea cucumber.
Tile is laid around wall to reinforce themt where wind and rain blow. Semi-cylindrical shaped plaster is to prevent water from spilling over the back of the tile and accelerating detachment.